

## リレーエッセイ

### 私の大学院生時代

上田 信

正確な時期と場所の記憶はない。その出来事を前後の状況から推測すると、おそらく私が東京大学大学院人文科学研究科東洋史専攻の修士一年から二年へと進学した一九八一年の春であつたと思われる。学部時代に加わつていた登山サークル「山岳旅の会」の同期同窓会のあと、二次会で渋谷界隈のデイスコに繰り出した。酒に酔い、店の強烈なリズムにも酔い、踊りの輪には加わらず、一人でテーブルの片隅に座つていた。「上田、出るぞ」と声をかけられ、我に返つた。テーブルの上に置かれたガラス製の灰皿に、そうめんのように細くちぎられたペーパーナプキンがうずたかく積まれ、お冷や用のグラスが二個ほど打ち毀たれて転がつていた。このとき壊れかけている自分を、そこに見た。

この出来事を時系列に沿つて私の経歴のなかに位置づけると、次のようになる。一九七六年四月、東京大学文科三類に入学。駒場キャンパスでは第二外国語として中国語を

選択し、Eクラス（中国語履修者クラス）に入る。中国を選んだ理由は、その前年にヴェトナム戦争が終結し、これからはアジアの時代になると予感したところにある。そして中国語の発音に苦労していたときに、毛沢東が死去し、文化大革命が終結し、四人組裁判でその悲惨な事実が明らかとなる。Eクラスの先輩たちや授業を担当した非常勤講師のなかには、文革の理念に傾倒して中国語を学ぼうとした人が多かった。学部二年のときの中国語のテキストは、毛沢東の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」であつた。フランスや日本の青年を魅了したマオイズムの理念と中国国内の現実とのあいだには、大きなギャップが存在していた。なぜ多くの知識人がこのギャップを見抜かなかつたのか。私なりに出した答は、「ごく普通の人々日々送っているごく普通の生活に対する理解の不足」であつた。普通の人々が何を食べ、何を着て、どのような家に住み、何を樂しみ、何を悲しむのか、そのような事柄を知っていれば、現実を見誤ることはなかつたに違いない。毛沢東の掲げた理念に忠実にあろうとすれば、栄養不足となり体力が持続しない。長期的には、高邁な理念を支える人間が、表舞台から退場せざるを得ない、と考えたのである。

一九七八年に文学部東洋史学科に進学し、本郷キャンパスに移る。翌七九年は東京大学創立百周年ということので、

大学当局は祝賀ムードを盛り上げようとしていた。東洋史の学生のなかからは、日本のアジア侵略に関わった人材（たとえば岸信介など）を輩出してきた東京大学の百年を無批判に祝ってよいのか、という意見が出され、反百年運動の一つの拠点となった。歴史的には一九六八・六九年の東大紛争に加わった学生が、大学院に進学したり、留年などを繰り返したりして大学に卡ろうじて残って時期にあたる。思想的には、全共闘時代のノンセクト・ラジカル系の譜を引いた最後の大衆的運動であった、と位置づけられるであろう。私は運動の中心には入らなかったものの、竜岡門を入ったところに聳える本部庁舎を囲んだデモなどには参加した。学生の行進が近づくと、ステンレス製のシャッターが高速で降りて庁舎の出入り口を封鎖、体格の良い職員（通称「ゲバ職」）がわらわらと出てきて、事務棟は強固な要塞へと姿を変貌させる。この光景を見たときに、まさに眼から鱗が落ちるといった感覚に囚われた。自分を取り囲む風景が、変容したといってもよい。「暴力を伴わない権力があり得ない」という、歴史を考える上でもっとも大切なポイントを学ばせてもらったように思われる。

東洋史学科のなかでも、教官に学生が異議を申し立てるという場面が、繰り返された。当時、学科長であった西嶋定生先生をはじめとして、学科の教官が怒りで顔色を変え

ることもあった。しかし、興味深かったことは、政治的な対立や意見の相違を、「学問」の世界には持ち込むまいと努力されていたことである。私の指導教官は、明清時代から近代にかけての社会経済史を講じていた田中正俊先生であった。その演習は午前一〇時頃から始まり、終わるのは夕刻の六時ごろ、長丁場であることで名物となっていた。演習そのものの内容が濃かったか、というと、そうとはいえない。中国江南の水田地帯で用水をクリークから汲み上げる竜骨車の回転の方向をめぐる議論が空転し、丸一日を費やしたこともあった。そんなの見てくりやいいだろう、となるところであるが、先生の「学問」への真摯な姿勢が、学生や院生の心を捉えていたように思われる。先生はアジア太平洋戦争のさなか学徒動員で徴集され、敗戦を台湾で迎えている。何かの飲み席で、台湾の飛行場を整備するために劣悪な食糧事情のもとで、働かされていたことを思い出したようであった。ヘビを捕まえて兵士仲間に分け合って食べたんだ、そうしたらその夜、兵舎のなかでみな眼が異様に光っていたね……、といったことを話してくれた。栄養失調と苛烈なしごきのなかで、崩れそうになる精神を支えていたものは、マックス・ウェーバーの学問論であったという。政治的な対立があったとしても、「学問」という場においては、真理に向かつては誰もが同等で

あるべきだ、ということだろうか。毛沢東的には、これはブルジョア的思想であって唾棄すべきだということになるかもしれない。しかし、「学問」に自らの生命の抛り所を置いてきた人格を目の前にすると、それを批判することは難しい。「学問」に対する信頼感は、当時の東洋史学科の教官が共通して持っていたように思われる。彼らにとって「学問」とは、精神的アジールであったといえよう。西嶋先生をつるし上げたといってもよい学生が提出した卒業論文に対して、西嶋先生はその「学問」的な水準を認め、「優」の評価を与えている。

こうした緊張した状況のなかで一九八〇年に提出した卒業論文は、中国の長江下流域デルタで、明末清初の混乱期に一時的に活躍した「打行」や「脚夫」と史料に出てくる無頼の姿を論じたものとなった。もともと都市をテーマに史料を集めているうちに、無頼の生き生きとした姿を描いた記述が手元に集まったので、こうしたテーマとなったのであるが、彼らに生き様に東大反百年闘争で活躍した学生たちの姿を重ね合わせたということもあった。明末の都市の民衆が明朝の後ろ盾を持つ郷紳と呼ばれた地域エリートに対して異議申し立てをする、この混乱に乗じて騒ぎを大きくする無頼たち、彼らは紛争の周辺でウロウロとしていた私自身の姿であったということができよう。この論文は

田中先生のアドバイスを得て、一九八一年の『史学雑誌』に「明末清初、江南における都市の『無頼』をめぐる社会関係」というタイトルで発表することができた。

ながながと学部時代の話をしてきたが、大学院修士課程の二年間は、その反動で人生最悪の時期となる。卒業論文は野球たどていうならば、初めて登板した公式試合で、最初のバッターボックスで初球、出会い頭にクリンヒットを打ってしまったようなものである。このフォームで行けば、続いてヒットが打てる、と思いきってしまった。単に対象とする地域を江南から浙江省東部の山地・盆地に移せば、修士論文は楽勝だと考えていた。しかし、その目論見は外れた。浙東と呼ばれる地域の地方志を、いくら閲覧しても、無頼に関する記述はほとんど現れない。しかも、一九八〇年ともなると反百年闘争も下火となり、ものを考えるきっかけとなる経験に遭遇することがなくなった。史料は集まらず、発想の転換を迫る出来事もなく、砂を噛むような時間だけが、ただ過ぎていくようになったのである。大学院では田中先生の演習で、清代江南の農家経営の実態を伝える『租覈』と呼ばれる史料を読み進めた。すでに何年にわたって田中ゼミで取り組まれていた史料であり、私の先輩にあたる岸本美緒氏（当時は中山姓）などが深い分析を行っていた。また、田中先生が非常勤講師として教

えていた慶應義塾大学の演習にも顔を出し、同じ史料を讀み進めた。このときに痛感したことは、私の漢文読解能力の低さである。いくら努力しても、訓点をつけ間違え、思いこみに基づいた解釈となってしまう。演習参加者がとくにするどい指摘をするものの、私にはまったく歯が立たない。この一方で、駒場キャンパスで太平天国研究の小島晋治先生が主催する読書会にも参加した。こちらには今年の夏に逝去された並木頼寿氏、佐藤公彦氏（現・東京外国語大学）・武内房司氏（現・学習院大学）などが参加し、闊達な議論が展開されていた。ここでも史料読解の甘さを痛感することが多かった。

演習・読書会の準備に追われるなかで、浙東地域の史料を収集したが、求めていた都市の民衆の姿を伝える記述はほとんど見あたらない。もともと考えていたテーマは雲散霧消し、あらたなテーマを見いださなければならぬと追い詰められていった。いろいろとテーマを構想するが、先行研究を参照してみると、すでにかんりの蓄積があることが判る。ほかの人が手をつけていないテーマはないか、と探しているうちに、だんだん重箱の隅に落ち込んでいく。修士の一年のときにあてにしていた地方志をおおよそ見終わってしまった。行き場を失い、浙東地域の史料を手当たり次第に漁るようになった。この時期には、族譜や民国期

の新聞記事（『申報』など）、民国期に収集された民話（浙東の紹興は周作人の郷里であつたために民話収集が盛んに行われていた）、法令集、さらには外交史料館に行つて領事館報告や東亜同文書院学生の卒業旅行の報告書まで、日本で見られるものとはかく手にしてみた。しかし、テーマは定まらない。使えるか分からないがとりあえず書き写した史料のファイルが、手元に作られていった。豆腐づくりにたとえて言うならば、濃厚な豆乳はできあがつた、しかし、それをかためるニガリがない、といった状況であつた。テーマを求めて、「中国民話の会」や中国を研究しようとする文化人類学の学徒が集う「仙人の会」などにも、顔を出した。しかし、それでもテーマが見あたらない。

当時の私の姿を知る中生勝美氏（現・桜美林大学）は、いやな奴だつた、という。追い詰められた東大インテリのいやらしさ、劣等感と優越感のないまぜとなつたアンバランスな精神、といった印象であつたという。ゆとりがまったくなかったことは確かである。目の前に分厚い壁が立ちはだかり、それを突破できずに出口はないものかと、右に駆けだしては何も得られず、左に這つていっても手がかりが得られない。冒頭に掲げた出来事は、そのころのものである。

これでも集めた史料をつづり合わせて、修士二年の時に

修士論文「清代郷村社会史研究」を提出した。これは豆腐にならない豆乳であった。幸いにも、卒論をまとめた史学雑誌の論考のおかげで、東京大学東洋文化研究所の助手に採用された。

一九八二年の春、旅に出ることにした。場所は四国。降水量・気温などの面からみて、浙東地域ともっとも似ていたのが、徳島であったことがその理由の一つ。また瀬戸内海に面した香川は乾燥しており、ふるくからため池による灌漑が行われていた。また、高知県の山間地域では、焼畑も最近まで行われており、その映像記録を国立民族学博物館で見ていることも、四国を歩いてみようと思いついた理由である。東京都心生まれの私は、郷村研究といっても農村や農業をまったく知らなかった。そこで歩いて四国をVの字型に縦断してみようと考えた。学部時代に山岳サークルで鍛えていたので、歩くことは苦にならない。テントを入れたザックを背負い連絡船で丸亀に入り、そこから歩き始めた。金比羅を過ぎて南下するなかで、景観を観察した。山の傾斜に沿って水田が高いところから順番に低地に向かつて拓かれていった様子が、手に取るように分かった。神社には信仰のために手をつけなかったため、うっそうと照葉樹林が茂っていた。

軽快に歩みを進め、高知側に抜けるために山地に入った。

#### 史苑（第七〇巻第一号）

手にした五万分の一の地勢図には、村から山中に点在し、村々を繋いで山道が伸びている。ところが、山に入ってしまったら行くところ、道が草木で覆われている。ヤブこぎをしなから村にたどり着くと、そこは廃村となっていた。人の住まなくなつた民家を覗くと、雨水を吸ってぶよぶよとカビを生やした畳の上に、茶碗が一つ夕日を受けて光っている。人のいない村に人の気配だけが残っている。もともとの計画では、民家に宿を借りるか村はずれで幕営しようと考えていた。しかし、私は逃げるように山を降り、日がとっぷりと暮れる前に高圧送電線の鉄柱の下にたどり着き、そこでテントを張ったのである。翌日、歩く氣力を失い、山を出て鉄道に乗って高知に抜けた。

私の大学院生時代は、こうして二年で終わった。その後、豆乳を固めるニガリを見つけるまでに、まだ時間を要した。学部の中国語Eクラスの級友の一人に、東京大学史料編纂所に採用されていた山田邦明氏がいた。たまたま本郷キャンパスの学食で出会い、雑談をしていたときに、中世日本の耕地開拓は扇状地の上部から進められ、最初に開拓された山地から河川が流れ出す地点に、領主の館が置かれることが一般的だ、という話を聞いた。このときに脳裏に、四国で見た景観が浮かび上がり、自分の集めた史料を開拓の順番という視点を入れて読み解いてみたらどうなるだろう

私の大学院生時代（上田）

か、という発想が浮かんた。このニガリは豆乳の一部分を固め、『社会経済史学』に掲載された「地域の履歴」という論文を作り上げた。こうして三年ほど続いたスランプを、ようやく脱することが出来たのである。

いま振り返ると、大学院時代に手当たり次第に史料を読んだことが、いまの私の研究の幅を作り上げていることは間違いない。しかし、二度とあのような状況には陥りたくはないものである。

以上、私の大学院生時代をその前史にさかのぼって記した。最後に史学科で歴史を学ぶものに、注意を喚起しておきたい。私が述べてきたことは、私の記憶のなかでつじつまを合わせるために、無自覚的に整理された出来事の連鎖である、ということである。嘘を意図的についていないことは保証する。しかし、ある光景が美化されたり、ある側面が誇張されたりしていることもあるし、話の筋を脇道にそらすような出来事は消去されている。史料として読んだ場合、この記録をどのように批判するのか、それは諸君しだいであろう。

（本学文学部教授）